

朝刊太郎

今から46年前、一つの曲がヒットしました。

僕のアダナを知ってるかい
朝刊太郎と云うんだぜ
新聞配って、もう三月
雨や荒にゃ慣れたけど
やっぱり夜明けは眠たいなア

これは、八反ふじお作詞、島津信男作曲による「朝刊太郎」という歌です。

新聞配達といえば、最近はおじさんがバイクで回る姿が一般的になりましたが、昭和30年代は中学生の少年達が新聞配達の主力でした。その頃の日本は、まだまだ貧しく、家族が助け合って生活することは、極当たり前のことでした。こうした中、中学生のような少年達のアルバイト先は新聞配達か牛乳配達ぐらいしかありませんでした。

この新聞配達の少年を激励すると共に、広く一般の理解を求めるために、昭和37年日本新聞協会によって、10月15日からの新聞週間内の日曜日(今年は10月16日)を「新聞少年の日」が制定されました(平成3年からは、「新聞配達の日・新聞少年の日」となっています)。

今朝も出がけに母さんが
苦勞をかけると泣いたっけ
病気でやつれた横顔を
思い出すたびこの胸に
小ぢゃな闘志を燃やすんだ

当時、働く少年達の目的は、「朝刊太郎」の歌詞にもあるように、進学資金や家計の補助が多かったといわれています。しかし、昭和40年代に入ると、日本も経済成長の波に乗り次第に豊かになると共に、小、中学生のアルバイト

も禁止されるようになり、新聞少年の主流は、中学生から高校生に移っていきます。その高校生達のアルバイト先も多様になり、新聞少年は年と共に減少しているといわれています。

私は、朝起きると真っ先に向かう先は、郵便受けです。その郵便受けに差し込まれている新聞を手にとると、今日も一日が始まるという思いが湧いてきます。

雨の日も、風の日も、吹雪の日でも、欠かさず新聞が届けられるということは、並大抵のことではないと思います。それは商売だから当然だ、とってしまえばその通りかも知れませんが、大雨の日にはビニールに包んで新聞受けに差し込まれているのを見ると、私は、「ごくろうさま」というより「ありがとう」という感謝の気持ちを強く感じるのです。

最近では、新聞を読まない若者が増えているといわれます。私の回りでも、新聞を定期購読していない方が結構いらっしゃいます。ニュースはネットで見られるし、必要があればコンビニでも買えるという訳です。

知りたいニュースを見るならそれでも良いのですが、世の中の動きを俯瞰するには、やはり新聞が最適ではないかと、私は思っています。

ニュースを人の手から手へと繋いでいく、凄く泥臭いけれど、でも、その温もりを大事にしたいと思います。

新聞配達のおじさん、毎日、毎日ありがとう。(塾頭 吉田 洋一)